

I 研究主題について

1 研究主題 「ふるさとに誇りをもち、夢の実現に向けて共に努力する生徒の育成」 ～夢を抱き、夢を言葉にし、夢の実現に向けて努力するFor the futureプラン～

2 研究主題設定の理由

(1) 学校教育目標の具現化を図るために

本校の学校教育目標は、「ふるさとに誇りをもち、夢の実現に向けて共に努力する生徒の育成」である。これは、熊本県教育基本計画並びに第6期御船町総合計画を基に設定したものである。

ふるさとやふるさとで活躍する人に誇りや憧れをもつことで、「こんな人になりたい」「人の役に立つ仕事をしたい」という夢や目標が生まれ、夢の実現に向けて努力する生徒を育てる教育実践を追求したいと考え、本研究主題を設定した。

(2) 社会の要請から

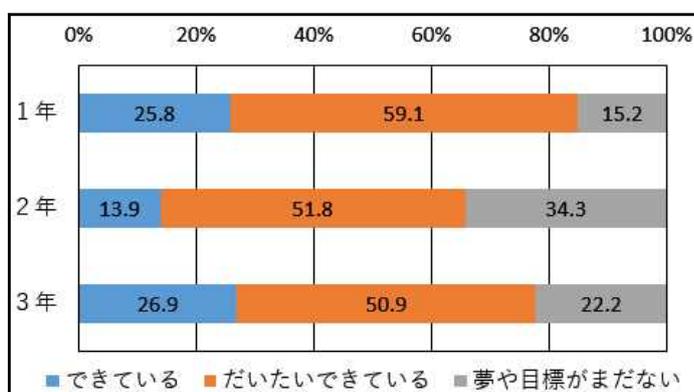
社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきた時代の中で、学校教育には、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、他者を価値のある存在として尊重し、協働して様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となるための資質・能力を育成することが求められている。

「団塊ジュニア世代」が65歳以上となる令和22年頃にかけて、我が国全体の人口構造は大きく変容していくと言われている。本校区においては、既に人口減少と高齢化に直面しており、次代を担う人材の育成が急務である。

また、コロナ禍の臨時休業中、児童生徒は、学校や教師からの指示・発信がないと、「何をして良いか分からず」学びを止めてしまう実態が見られたとの調査報告もある。夢や目標をもって自立した学習を行う児童生徒の育成が大きな課題となっている。

(3) 生徒の実態から

令和2年度から本校が取り組んでいる“CAP-Dシステム”（目標設定から生徒等が参画し、定期的に達成状況を点検し、課題の解決策を生徒、教職員、保護者一人一人が考案し実践する御船中型PDCAサイクル）から、「夢や目標の実現に向けて努力している」と回答



「夢の実現に向けて努力していますか」への回答状況
(R2.6.25調査)

する生徒が3割に満たない状況が分かった。勤労観や職業観が未熟で、自立的な進路選択や将来計画が希薄である状況があった。キャリア教育の充実が喫緊の課題であった。

II 研究の方法

1 研究の仮説

- (1) “生き方”と出会う学習を計画的に行えば、生徒は夢や目標を抱くだろう。
- (2) 意見を発信する機会を計画的に設ければ、生徒は夢を語るようになるだろう。
- (3) 学力向上の取組を行えば、生徒は夢の実現に向けて努力するようになるだろう。
- (4) 目指す姿を共有し、その達成状況を定期的に把握する機会を設ければ、課題を解決し生活をより良くしようとする態度が育つだろう。

2 研究の構想と視点

御船中「For the future プラン」

ふるさとに誇りをもち、夢の実現に向けて共に努力する生徒の育成

「基礎的・汎用的能力」(人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアアプラインソング能力)



- (1) 生徒がふるさとで活躍する方の“生き方”と出会うEncounterプロジェクトとして、「夢輝き！教育講演会」「職場体験」「御船輝き学習」等を行う。
- (2) 生徒が語彙力を高め、自分の意見を発信する「読書活動の推進」「NIE活動」「集会・生徒会活動の工夫」等を行う。
- (3) 生徒の基礎学力を向上する「SMARTな授業実践」「家庭学習の習慣化(基本的生活習慣推進)」「学力向上タイム」「ゆうあいタイム」等を行う。
- (4) 成果指標を共有し、達成状況を把握し、生徒・教職員・保護者が主体的に改善策を考え取り組む“CAP-Dシステム”を機能させる。

Ⅲ 研究の内容

1 「夢を抱く（生き方との出会い）」 Encounter プロジェクト

(1) 夢輝き！教育講演会



本校職員の進行で思いを語る藤川さん

夢が芽生え、夢を抱くためには、憧れをもつことができる大人の生き方と出会うことが必要である。

本校卒業生である藤川優芙さんは、中学3年在学時に熊本地震に遭い、自らも被災しながらも吹奏楽部員として、避難所となった本校体育館演奏会を実施するなど、被災者を元気にする活動を行った。その後、災害によって変わり果てたふるさとの復興にたずさわりたいと工業系の高校に進学し、令和2年4月に建設会社に就職した。



真剣に話を聞く生徒たち

藤川さんを招聘した第1回「夢輝き！教育講演会」を令和2年12月に全校生徒を対象に開催した。講演に不慣れな18歳の藤川さんに配慮して、吹奏楽部顧問の職員をコーディネーターにして、中学生だった当時の思いや建設業を目指して努力した経緯や夢をもつことの素晴らしさを生徒たちに語ってもらった。



講演の感想を述べる生徒

藤川さんの「土木の道に進むことを途中で何度も諦めそうになったけど、自分の夢を必ず叶えるという強い気持ちをもって努力しています。夢を追う中で、御船町の良さに気づきました。私はみなさんと同じです。みなさんにできないことはありません」とのエールに、多くの生徒が質問や感想で返しを行うことができた。この様子はドキュメント番組として地元テレビ局が放映もした。

生徒の感想から、講師の生き方や考え方に触発されて、夢を探し始めている様子やふるさとの役に立ちたいとの思いが芽生えていることが分かり、令和3年度から年2回の「夢輝き！教育講演会」を年間計画に位置づけて実施することにした。全ての講演会も、生徒が講師に直接質問したり、感想を述べたりする時間を設けることにした。

令和3年度は、本校卒業生の藤木正幸 御船町長、南阿蘇出身のパラスリート 中

尾有沙さんに講話をお願いした。令和4年度は、南関町出身のゴールボール金メダリスト浦田理恵さん、大津町在住で1型糖尿病と向き合いながらエアロビックス競技を続けられた大村詠一さんの講演を実施した。

講師選定は、県内出身・在住者で、ハンディキャップを背負う生徒も夢を抱ける方等の視点で行っている。令和5年度以降も講演会を継続できるように、全保護者の了承を得てPTA予算に生徒活動支援金の項目を新たに設けて、講師謝金や旅費、猛暑日の講演がエアコンの効いた広い会場で開催できる会場使用料に充てられるようにした。講演会実施を持続可能にしている。

さらに、諸研究指定を活用した生徒対象講話等も、研究指定に関する内容に加えて、夢をもって努力することの大切さの視点でお話をいただくよう依頼している。令和3年度は、6月に県内弁護士、7月に東北大学加齢医学研究所所長、9月に熊本日日新聞社常務取締役の講話を実施した。令和4年度は、7月に久留米大学学長、10月に三井不動産常任相談役の講話を行った。

目の前で自己の生き様を語る講師の人生観や職業観に触れ、自分自身の生き方を思い描く生徒が多く、大きな効果がある。今後も継続したいと考えている。

(2) 職場体験

子どもたちの生活や意識の変容、学校から社会への移行をめぐる様々な課題、そして、望ましい勤労観、職業観を育む体験活動等の不足が今日指摘されている。特に、コロナ禍の中で制約が多い日常生活や教育活動においては、地域の方との触れ合いや実体験が不足し、このことは大きな課題となっている。

職場体験には、生徒が直接働く人と接することにより、また、実際的な知識や技術・技能に触れることを通して、学ぶことの意義や働くことの意義を理解し、生きることの尊さを実感し、生徒が主体的に進路を選択決定する態度や意欲など培う教育活動として、重要な意味を持つ他に、次のような効果が期待できる。

若者コーナー

凡事徹底して
夢かなえたい

田中伶奈 中学3年生
(御船町)

学校の、パラリンピックのゴールボール女子に日本代表として4大会連続で出場し、ロンドン大会では金メダルに輝いた浦田理恵さんの講演がありました。浦田さんは、優しく明々で、やる気にあふれている人です。中学生の私たちに

でもわかりやすい話で、聞いていて元気をもらったように感じました。特に心に残っているのは、「チャレンジをした先に失敗はない。あるのは、成功か成長だ」「凡事徹底の積み重ねが夢をかなえる」という言葉です。

私は、学校の最上級生として、今やるべきことを雑にしている部分があります。自分で立てたスケジュールが守れず、今日までにやるはずだった学習を翌日に持ち越したりすることもありません。家庭学習を始めます。

時刻を守ることやあいさつをきちんとすること、親切にしようと思ったときにお礼を必ず言うことなど、一つ一つを丁寧にやっていたらいいと思います。

また、私は、大人数の前で話すのが嫌いで、失敗したらどうしようと思ひ、チャレンジしなかったことがあります。私は音楽関係の仕事に就きたいという夢があります。夢に向かって、今やらなければならぬことに一生懸命にチャレンジしていこうと思ひます。

地元紙に掲載された講演の生徒感想

① 生徒にとって

- 自己の理解を深め、職業の実像をつかみながら、望ましい勤労観、職業観を身に付けることができる。
- 学校の学習と職業との関係についての理解を促進することができる。
- 異世代間も含めたコミュニケーション能力の向上が図れる。
- 実的な知識や技術を学ぶことができる。等

② 家庭にとって

- 家族の一員としての自覚を深めることができる。
- 家族の役割を再認識できる。
- 職業に関する会話を促進できる。等

③ 保護者にとって

- 働くことを通して家族の会話を促進できる。
- 子どもたちの働く姿から、新たな一面を発見できる。
- 中学校のキャリア教育を理解できる。等

④ 地域・事業所にとって

- 地域の中学生について理解を深めることができる。
- 地域が一体となって生徒を育てていこうとする機運を高揚できる。
- 次代を担う人材育成を行うことができる。
- 企業の社会的役割を具現化できる。等

| 令和4年度 第2学年 職場体験学習の流れ | | | | | |
|----------------------|-----------------------------|------|-------------|---|---------------------------------------|
| | 日付 | 校時 | 場所 | 内容 | 備考 |
| 事前学習 | 6月2日 (木) | 5, 6 | 多目的室 各教室 | オリエンテーション・事業所発表 (多目的) しおり作り・自己紹介カード (各教室) | ・オリエンテーション資料 ・しおり資料 ・自己紹介カード |
| | 6月10日 (金) | 5 | 事業所 ごと | ・メンバー確認・班長決め ・事業所情報記入 ・質問内容を考える | ・しおり(最終確認項目、 事前訪問シート) 各事業所FAX用紙 |
| | 6月15日 (水) | 5 | 事業所 ごと | ・事前訪問アポイント作成 ・練習→電話 ・場所・自転車・ヘルメット確認 | ・しおり (事前訪問アポイント) |
| | 6月16日 (木) | 5 | 事業所 ごと | ・練習→電話・事前訪問の練習 ・質問内容を考え役割分担 | ・しおり (事前訪問アポイント) |
| | 電話のアポ取りを遅くとも、6月24日までは取っておく。 | | | | |
| | 6月30日 (木) | 5 | 事業所 ごと | 事前訪問交通手段確認 シミュレーション練習 | ・しおり |
| | 7月1日 (金) | 5, 6 | 各事業所 | 事前訪問 | ・事前訪問シート |
| | 7月4日 (月) | 4 | 事業所 ごと | 直前最終確認 ・心得・活動・インタビュー ・マナー・交通安全・下校等 ・面会の仕方作成→練習 | ・しおり (最終確認項目) (面会の仕方) |
| 当日 | 7月5日 (火)～ 7月7日 (木) | 1～6 | 各事業所 | 職場体験 職業インタビューレポート | ・活動記録(日誌) ・職業インタビュー レポート |
| 事後学習 | 7月8日 (金) | 1 | 各教室 | ・振り返り・お礼状作成 | ・振り返りシート ・お礼状 |
| | 7月11日 (月)～ | | | 「御船輝き学習」 職場体験で生まれた疑問や興味を もとに探究的な学習 | 探究課題の焦点化 課題解決の計画 聞き取り、まとめ |

職場体験学習の計画

⑤ 学校・教員にとって

- 職業や産業に対する理解の深化を図ることができる。
- 生徒理解の多様化と深化を図ることができる。
- 地域や事業所についての理解を促進し、地域における教育力を把握できる。
- 学校教育への理解や協力を得ることができる。等

これらの効果や意義をふまえて、コロナ禍の中でも学びを止めないために、地域の事業所と綿密に連絡をとり、生徒の希望を尊重して職場体験の計画を立てた。以前に比べて、医療機関や高齢者等に関わる福祉事業所への体験生徒数を減らし、災害発生時に緊急対応を求められる機関や事業所への体験生徒には、代替事業所も準備したうえで49事業所の協力を得て、事前事後の健康観察を徹底するために3日間の日程で実施した。



食品加工場の職場体験をする生徒（上）

若者コーナー

自分から行動
大事さを学ぶ
高田運 中学2年生
(御船町)

僕は、日用品の大型店舗で職場体験をしました。体験場所が決まったとき、自分で考えて行動できるか不安でしたが、働く経験が実際にできることにワクワクもしていました。

商品の品出しや商品棚の掃除は、重たい商品をいくつも抱えて作業し、商品の名前が見えるようにきれいに並べるのです。その作業を毎日3時間以上するので、とても疲れました。特に大変だったのは商品の検品です。一つでも数量に違いがあつたら、商品を最初から探す必要がありま

指本をされて動くのではなく、自分で考えて行動することが仲間と協力する

「商売はクレームも受けなければならないけれど、地域のためにサービスを提供したいと頑張っている」と話してくださいました。あいさつの大切さも職場体験で再確認できました。これからの生活でも、自分から行動することや明るいあいさつを心がけていこうと思います。

地元紙に掲載された職場体験の生徒感想（右）

初日は緊張の面持ちだった生徒たちも、地域で活躍する方々のプロ意識と優しい

人柄に触れ、将来に向けた進路設計を希望をもって検討している様子うかがえた。

学校だよりを町内全戸に回覧したり、生徒作文を地元新聞社に投稿したりして学校教育への理解を図ったことや、校外での生徒のボランティア活動や地域でのあいさつ励行を展開して中学生への肯定的評価を高めてきたことが、コロナ禍の中にあっても中学生を職場体験に温かく受け入れていただく基盤になっていると考える。

真摯に体験活動に取り組む生徒の様子に感心した職場からは、巡回の職員に対して「○○君は、とても頑張ってくれます。校長先生に是非伝えてください。」等の声もいただ

いている。

(3) 御船輝き学習

総合的な学習の時間は、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすることを目標として行われる。

本校は、ふるさとで活躍する人の生き方に焦点を当てた探究的な学習を「御船輝き学習」と名付けて取り組んでいる。

第1学年は“御船町の過去を知る”を、第



地域の方を学校に招いて聴き取りをする生徒

| 総合的な学習の時間のテーマ及び目標 | |
|-------------------|---|
| ◎テーマ | 「御船輝き学習」 ～未来の自分を見つめて～ |
| ◎目標 | 1 様々な体験活動の中から課題を見付け、主体的に学び、考え、判断し、行動できる資質と能力を育てる。(探究) 2 御船町で活躍する人の生き方に学び、ふるさとに誇りを持ち、自己の生き方・あり方を見つめ、互いの良さを生かし、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。(協働) |

| 育てたい資質・能力・態度 | | 総合的な学習の時間の内容 | | |
|--------------|--|--------------|--|--|
| 学習方法 | <ul style="list-style-type: none"> 様々な情報や問題状況の中から、適切に課題を設定することができる。(課題設定能力) 課題解決を目指して、情報を収集・整理・分析し、まとめることができる。(情報活用能力) | つばさ | ◎豊かな心 ・人権学習、性に関する指導 ・夢輝き！教育講演会、観劇会 ・体験学習 1年：集団宿泊教室、職業調べ 2年：職場体験学習、修学旅行 3年：進路学習、修学旅行 課題解決型の学習 生き方を見つめ、生き方を考える学習 コミュニケーション能力を育てる学習 | |
| 自分自身 | <ul style="list-style-type: none"> 課題解決の過程やその成果から、自己の生き方を見つめ直すことができる。(自己表現力) 自ら学ぶ意欲をもち、生涯にわたって学び続けようとする態度を養う。(自己表現力) | | 御船輝き学習 | ◎自ら学ぶ意欲 「御船輝き学習」 1年：御船町の過去を知る 2年：御船町の今を体験する 3年：御船町の未来をつくる ふるさとの人々の生き方に学ぶ活動 |
| 他者や社会 | <ul style="list-style-type: none"> 互いの特徴を生かし、協働して課題を解決することができる。(コミュニケーション能力) 課題解決の過程を通して、自分なりの社会参画の方法を考えることができる。(創作・表現力) | | | |

2学年は“御船町の今を体験する”を、第3学年は“御船町の未来をつくる”を、それぞれテーマにして、ふるさとで活躍する人に思いや生き様を聴き取って学ぶ活動を創造している。

困難を乗り越えて、現在の仕事や活動を続けておられる人の生き方に触れ、「人の役に立つ仕事をしたい」と自分の意見をまとめている生徒が多くいた。

生徒が聞き取った内

| 「御船輝き学習」各学年のテーマ〔目標〕及び学習課題、学習内容 | | |
|--------------------------------|--|---|
| | テーマ・〔目標〕 | 学習課題と学習内容 |
| 1年 | 御船町の過去を知る 現在の御船町をつくった人から学ぶ御船町の様々な分野に関する人の生き方を学ぶことで、自分の適性や興味につながる発見をする。 | (例)「なぜ〇〇を大切に守っているのだろうか」「困難を乗り越えて〇〇するのはなぜだろうか」 ・聞き取り ・調べ活動(図書・タブレット) ・ふるさとへの思い・生き方を学ぶ |
| 2年 | 御船町の今を体験する 現在の御船町に貢献する人から学ぶ御船町などで働く人の生き方を学ぶことで、自分の進路や社会を見つめ、将来の自分の生き方について考える。 | (例)「なぜ〇〇の仕事をしているのだろうか」「仕事をするうえで大切なものは何だろうか」 ・聞き取り ・調べ活動(図書・タブレット) ・仕事への思い、人生設計を学ぶ |
| 3年 | 御船町の未来をつくる 安全の観点から未来について考える御船町の防災・安全等に関する人の生き方を学ぶことで、将来への課題を見付け、社会の中における自分の生き方を切り拓いていく。 | (例)「被災時に、なぜ〇〇を選択したのだろうか」「より良い社会を創るために何ができるだろうか」 ・インタビュアー ・調べ活動 ・シナリオ作成 ・使命感、社会貢献の生き方を学ぶ |

総合的な学習の時間の全体計画(抜粋)

容に自分の感想・考えをまとめた広用紙を公共機関に掲示する機会をいただいた。ご覧になられた町民の方から「町内で頑張っている方がこんなにたくさんいらっしゃるのを改めて知りました。中学生の学習に元気をもらいました。」との感想も寄せられた。

この他にも、春休みの生徒会リーダー研修で、バスを貸し切って史跡等を見学して、保全や町民への啓発に尽力されている方の話を聞く活動も行っている。このことが地域や町民のためになる生徒会活動を考える契機になっている。

また、学校だよりの裏面に生き方に関する記事を掲載し、家庭や地域で生徒と一緒に生き方について会話を行う資料として提供している。保護者からは「学校だよりが楽し

【おばあさんの新聞】

平成24年の「新聞週間」に、日本新聞協会が、新聞配達にちなんだエッセイコンテストの発表をしました。その最優秀作品に選ばれたのが、岩田哲人（てつんど）氏の応募作品、『おばあさんの新聞』でした。そのエッセイは次のような内容です。

1942年に父が亡くなり、大阪が大空襲を受けるという情報が飛び交う中で、母は私と妹を先に故郷の島根県出雲市の祖父の元へ疎開させました。その後、母と2歳の弟はなんとか無事でしたが、家は空襲で全焼しました。

小学5年生の時から、朝は牛乳配達に加えて新聞配達もさせてもらいました。日本海の風が吹きつける海浜の村で、毎朝40軒の家への配達はずらいつら仕事でしたが、戦争の後の日本では、みんながづらい思いをしました。

学校が終われば母と畑仕事。そして私の家では新聞を購読する余裕などありませんでした。

新聞配達をしながら表紙の記事を興味深く読んでいた私を見た三原のおじいさんが「夕方に新聞を読みに来て良いよ。」と言ってくれました。

毎日、一生懸命、新聞配達をしました。

そして、夕方には、三原のおじいさんが読み終わった新聞を、毎日読ませてもらいました。何年か経ち、寒い冬に三原のおじいさんが亡くなりました。

三原のおばあさんは、「おじいさんはいないけれど、今まで通り新聞を読みに来て良いよ。」と言ってくれました。私は、それから三原のおばあさんの家に新聞を読みに行きました。

ある日、私が「おばあさん、新聞がきれいなままで、まだ読んでいないの？」と聞くと、おばあさんは「・・・・・・いつも、おじいさんが最初に読んでくれたけん。」

と言えました。

それから毎日、おばあさんは真新しい新聞を読む私の横に、嬉しそうに座っていました。

そのおばあさんが、3年後に亡くなられ、中学3年の私も葬儀に伺いました。

隣席のおじいさんから、「てつんど、おまえは知ってたか？おばあさんはお前が毎日来るのが嬉しくて、字が読めないのに新聞をとっておられたんだよ」と、思いがけないことを聞かされました。

「・・・・だから新聞は綺麗だったんだ。」

おばあさんがいつも優しくお茶まで出して、「てつちゃん、べんきょうして、えらい子になれよ」と、まだ読んでいない新聞を私に読ませてくれていたことを思い出しました。もうお礼を言うこともできないおばあさんの新聞・・・・。涙が止まりませんでした。

この岩田哲人氏は、島根県知事や国会議員をした政治家でしたが、現在は引退して渋谷にお住まいで、85歳です。お父様を小1で亡くし、お母様の実家の島根県に引越しをされ、小5の時に新聞配達を始めたのです。貧しかったので、新聞購読ができず、配達した家のおじいさんが亡くなった後は、おばあさんに読み終わった新聞を読ませてもらったのです。字の読めないおばあさんは、毎日やってくる哲人君のために新聞を取り続けてくれたことを、おばあさんの葬儀に参列して知るのでした。

その激励のおかげで高校を卒業後、東京大学に進学し、実業界で活躍した後、政治の世界で活躍されたのです。



ふるさとの先輩から

坂田友紀（平成元年3月 御船中卒業）

私は生まれも育ちもこの御船です。この御船に住んで良かったと思うことが二つあります。

一つ目は自然です。家の近くには御船川が流れています。小学校時代の登下校では、沿道に茂っている草花で遊び、近道と称しては田んぼを横切って帰っていました。眼鏡橋もまだ、残っていて、写生大会の時は必ず行く場所でした。俳句を作る授業では、稲刈り終わった田んぼに寝そべり空を眺めながら句を考えたこともありました。小中学校時代を自然豊かなか中で過ごすことができました。

そしてもう一つはご地域の方です。

最近マスメディアでは近所づきあいがなくなったといわれることが多くなりましたが、この御船ではそんなことはありません。私の子どもたちも、近所の方がいつも見守ってくださいます。「あいさつ上手にしようよ」とほめてくださいます。子どもに伝えるとうれしそうです。そして、またあいさつをしているようです。私が「あいさつをしてね」と言うより近所の方がほめてくださった言葉が行動の原動力になっています。また、子どもたちを叱ってくださいます。「ごみ置き場の上ののって遊びよったよ。落ちたらあぶながよっていつとっけんね。」成長すると子どもたちの行動範囲は広がります。そして、親の目を盗んでいたずらもします。そんな時に声をかけてくださり、地域で過ごすルールを教えていただきます。地域で育ててもらっている実感します。このようにほめたり、叱ったりしてくれる地域の方は子どもたちだけではなく、私自身にもありがたい存在です。

この御船は、昔も今も変わらない自然が残り、声をかけてくださるおじいちゃんやおばあちゃんがいらっしゃいます。みなさんも、御船で生まれ育ったことをぜひ誇りに思ってほしいと思います。こんなすてきな町は他にはありませんよ。

毎月発行の学校だよりの裏面（令和3年度3月号）

みです」、地域の方からは「学校だよりの裏が読み応えがある」「中学校の学校だよりが回覧版の中に入ると、家族で読みまわしをする家が多くて、回覧が遅くなる」という嬉しい声が寄せられている。

2 「夢を言葉にして一步踏み出す（表現力育成）」Take a step プロジェクト

自分の夢や目標を言葉にして示すことで、公表効果で自分の意識が変わる、簡単に諦められない状況をつくる、応援する人が生まれてやる気が出る、周囲の人から夢や目標を達

- 8 -

成するための情報が集まる等の効果が生まれる。

そこで、自分の考えや思いを伝える力を育てることが、夢の実現に向けて努力する一歩を踏み出すために必要と考えて取り組んだ。これは、人間関係形成・社会形成能力等のキャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力と重なるものと捉えた。

(1) 読書活動の推進

言葉で表現するための語彙力やキャリアプランニング能力等を育成するために、次のような取組を行い、生徒の読書活動を推進した。

① 全校朝読書

毎日20分間の朝活動に全校生徒が読書をする時間を設定している。教室の黙読だけでなく、「朝読書in図書室」と名付けたクラス輪番の図書室を活用した読書活動やブックトーク、教員による読み聞かせも行っている。



ブックトークの様子

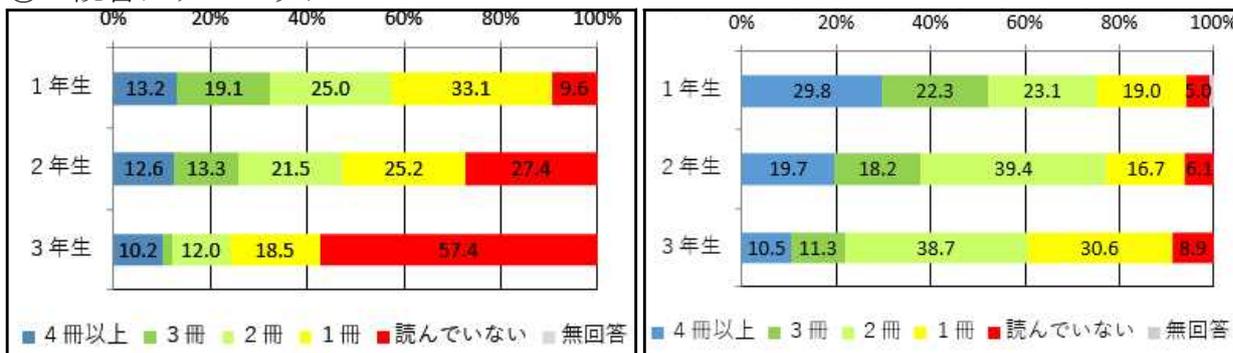
② 学級文庫の設置

年2回、各家庭に不要な書籍の寄付を募り、集まった本を中心に学級文庫を設置している。CAP-Dシステムのアンケート調査で、一冊の本を読み終えることができない生徒が複数いる課題を解決するために、図書委員会で「My文庫しおり」を作成し、読む途中の本に各生徒専用のしおりを挟み、続きから読むようにした。しおりには読書記録を記入できるようにした。生徒のアイデアで、記録欄が埋まった場合は、読書量に応じて色が替わる「My文庫しおり」も生まれた。

③ 選書活動

年度毎に新しく本を購入する際は、全校生徒の希望を参考に図書委員が書店で直接本を手に取り購入する選書活動を行っている。

④ 読書クラスマッチ



生徒が1か月に呼んだ本の冊数 (左: 令和2年8月、右: 令和4年11月)

図書委員のアイデアで、クラス内で互いに励まし合って読書する雰囲気をつくろうと、読み終えた本の数を競うクラスマッチも行っている。

年を追うごとに、読書の実態を踏まえて読書活動を推進する生徒や教職員の工夫溢れる取組を行っていることで、生徒の読書量は確実に増えている。

(2) NIE活動

新聞記事の要約や感想をまとめたりする活動の他に、記事についての意見を発表する1分間スピーチや新聞紙面を参考にレイアウトや見出し、簡潔な文章を考えて情報や意見を表現する活動を行っている。また、ものづくり部の生徒が制作した閲覧台で新聞記事を読み合う生徒の姿もある。



報道関係者に取材する生徒

平成28年熊本地震の記事をもとに、未曾有の大災害の中で自らも被災者でありながら、救済や復旧・復興に尽力された方に取材を行い、情報を整理して学んだことを発信する学習を行った。

若者コーナー

**仕事の使命感
記者から学ぶ**

茂野ゆうな(中学2年
(御船町))

道徳の時間に、熊本地震を題材にした副読本「つなぐ」に掲載されていた新聞記者の方の話を聞きました。熊本地震の直後に新聞記事を通じて苦勞された話でした。

私は、熊本地震で自宅が半壊して家族と車中泊をしました。地震直後のことを思い出すと、パニックになって自分や家族のことを考えるのに精一杯でした。

「大変なのは自分たちだけじゃない。新聞を届けて被災された方が元気を取り戻してほしい」という気持ちで配達を続けていたんじゃないかと、考えました。

仕事は、自分のためだけじゃなく、人のために働くということなんだと思います。

私は大人になって仕事を始めたら、今回の話を忘れずに、誰かに勇気を与えられるように使命感をもって働きたいと思いました。

「つなぐ」に掲載されていた新聞記者の方の話を聞きました。熊本地震の直後に新聞記事を通じて苦勞された話でした。

「大変なのは自分たちだけじゃない。新聞を届けて被災された方が元気を取り戻してほしい」という気持ちで配達を続けていたんじゃないかと、考えました。

仕事は、自分のためだけじゃなく、人のために働くということなんだと思います。

私は大人になって仕事を始めたら、今回の話を忘れずに、誰かに勇気を与えられるように使命感をもって働きたいと思いました。

地元紙に掲載された道徳の時間の学習についての生徒の意見

道徳の時間に新聞記者(当時)の方をお招きして話を聞き、仕事の使命感について考え議論する学習を行った。

生徒の意見を保護者の同意を得て 地元新聞社に頻繁に投稿し、紙面に掲載された生徒の数は、令和2年に38人、令和3年度に34人、令和4年度は12月末時点で48人になる。掲載された作文は、放送委員が昼の放送でも

紹介している。記事をご覧になった保護者や地域の方から「新聞見たよ。頑張っているね。」「しっかりした考えをもっているね。」「私たちも元気が出た。」と声をかけられ、自己肯定感を高める生徒の様子や地域の方の温かさに感謝する生徒の様子がある。

(3) 集会・生徒会活動の工夫

始業式、終業式や集会の発表は、原稿を見ずに伝えたい人の表情を見て発信することを推奨している。

文化面やスポーツ面で優秀な成績を収めた生徒への表彰状の伝達も、表彰を受けた生徒が感想・意見を全校生徒に発表する機会としている。

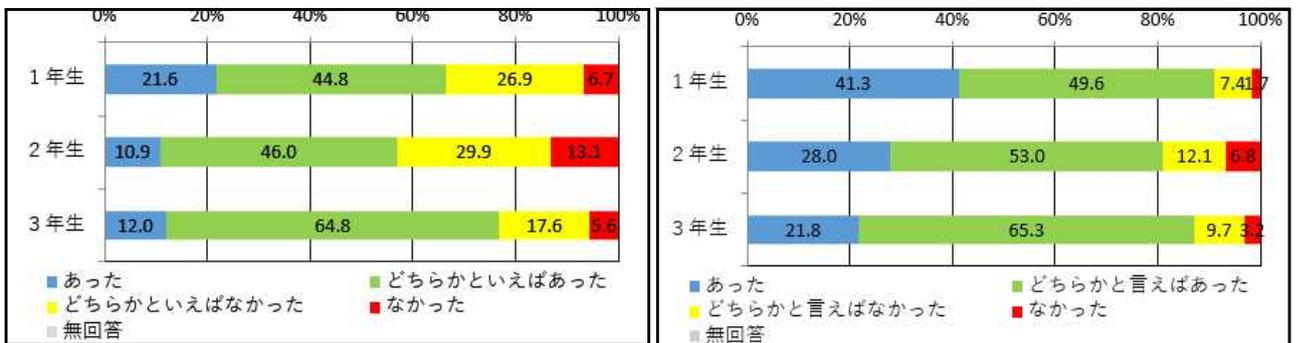


全校集会でのパネルトークの様子

生徒集会も、委員会の取組の紹介や呼びかけを寸劇で楽しく行ったり、生活場面の画像やアンケート結果をスク

リーンで見ながらのパネルトークを試みたりする工夫が生まれ、自分や周囲の人と考えや意見を堂々と交わす姿が見られるようになった。

また、ほとんどの生徒が、自分の言葉で発表される意見を興味深く見つめるようになり、意見に頷いたり、笑顔で返したり、質問をしたり、自分の意見を返したりする様子が増えてきた。



「自分の考えや意見を発表して「良かった」と感じるがありましたか」の質問への回答状況
(左：令和2年6月、右：令和4年11月)

互いの考えを知り、意見を尊重しながらよりよい生活・活動を創りあげること、活動の意義や成果を確認でき、所属する集団（学校）への肯定的な感情を抱く様子もある。

(4) 学習成果発表会

総合的な学習の時間の探究的な学びの成果を工夫して発表するようにしている。壁新聞等の掲示であったり、クイズ形式や聴き取った方の生き様を劇化して発表したりしている。

劇発表については、シナリオ担当の生徒が取材した内容で台本を書き、演者担当の生徒が自分が登場人物になりきった自分の思いをセリフに修正する意見を述べ、協働で劇

を作り上げていく。劇を作り上げていく過程で、取材した方の生き方と自分の考えを照らし合わせて、これからの生き方を考える学習となり、観ている生徒も自己の生き方を見つめる機会となっている。

学習を通して、自分たちも地域や困った人たちのために何かをしたいと考える生徒が多くなり、生徒会活動等で美化ボランティアや被災地への義援金募金、ベルマーク運動や1円玉募金の呼びかけを行っている。令和4年度には、週2日の早朝環境美化ボランティアを継続している男子バスケットボール部は日本善行会の全国表彰を、毎月地域の美化を行っているJRC委員会主催の活動は小さな親切運動の全国表彰を受けた。



学習成果発表会で劇を演じている生徒

3 「夢の実現に向けて努力する（学力向上）」 Dreams come true プロジェクト

(1) SMARTな授業実践

本校区は熊本地震で甚大な被害を受け、生活再建がままならない家庭も少なくなく、就学援助を申請する家庭の割合は約14%と他地域に比べて多い。生徒一人一人が将来を切り拓く力を育てるために確かな学力は不可欠なものである。

A 全員の「やってみよう」「なるほど」が生まれる“自力解決”と対話的で深い学びが生まれる“協働解決”の場の設定

見通しをもった“自力解決”にしよう！
必要性・手段を明確にした“協働解決”にしよう！

※『見通し』とは、解決の方法や手順を自分なりにイメージすることです。
 ※『必要性・手段』とは、何のためにペアやグループ活動をするのか、何について話し合ったり協力したりするのか、どのような方法・役割で活動したりするのかということです。

| Before | After |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ▲ 見通しをもてない生徒がいるのに、自力解決の時間を長くとり、個別指導でヒントを出す（自力解決にならない） ▲ 意見が出ないから（時間に余裕があるから）、班で話し合う時間を設ける | <ul style="list-style-type: none"> ○ 互いの気づきや解決の方針を出し合い、解決方法や手順を可視化して自力解決の時間を設ける ○ ペアやグループで活動する意義を確認し、活動の方法や役割、話し合いの視点を可視化して活動させる |

◇ 協働解決では、どんな手順で何をすればよいかのかを、簡潔に（箇条書きで）板書しましょう。

◇ 自力解決、協働解決の過程での気づきや交わされた意見をノートやシートに記録させましょう。児童生徒が自分の成長を実感し、主体的に課題を解決する力を身につけることができます。

「SMARTな授業実践」リーフレットの一部

生徒の学力向上を図る場は授業であるが、教員の大量退職期を迎えて先輩方が培ってきた授業スキルが若い教員にうまく伝達できていない実態もある。そこで、普遍的な授業改善の視点を5つに整理して「SMARTな授業実践」と名付けて、生徒が「わかった」「できた」と実感できる授

業づくりに取り組んでいる。5つの授業改善の視点は次のとおりである。

S（シンプル）

学習内容を焦点化する。わかりやすい指示や説明・発問（簡潔に、視覚で捉えやすく）をする。

M（目的・目標）

単元のゴールの姿を設定する。「何がわかればよいのか」「何ができればよいのを明確にして『めあて』を示す。

A（アクティブ）

生徒が活動する時間を確保する。教師がしゃべりすぎない。

R（練習）

定着を図る時間を確保する、定着や理解度を診る小テストを実施する。

T（たしかめ）

共通のノートである板書をもとに学習のまとめをする。生徒が学びを振り返る「問い」をする。

教員が「SMARTな授業実践」を意識するよう、改善例を明瞭にまとめたリーフレットを作成し、校区内の6つの小学校教員にも毎年度配付している。

授業改善が進むよう、全員が公開授業を行うグループごとの小研や全教員が授業参観し授業を受けた生徒も参加する年2回の大研を行っている。大研は、学習者である生徒の意見を参考に、授業改善の方策を協議している。

この取組は、令和3年度に時事通信社発行の内外教育でも熊本県教育委員会推薦校として紹介され、岡山県や山口県の教育委員会や学校などの県内外からの視察もある。これらの視察も本校教員の実践意欲を高めている。



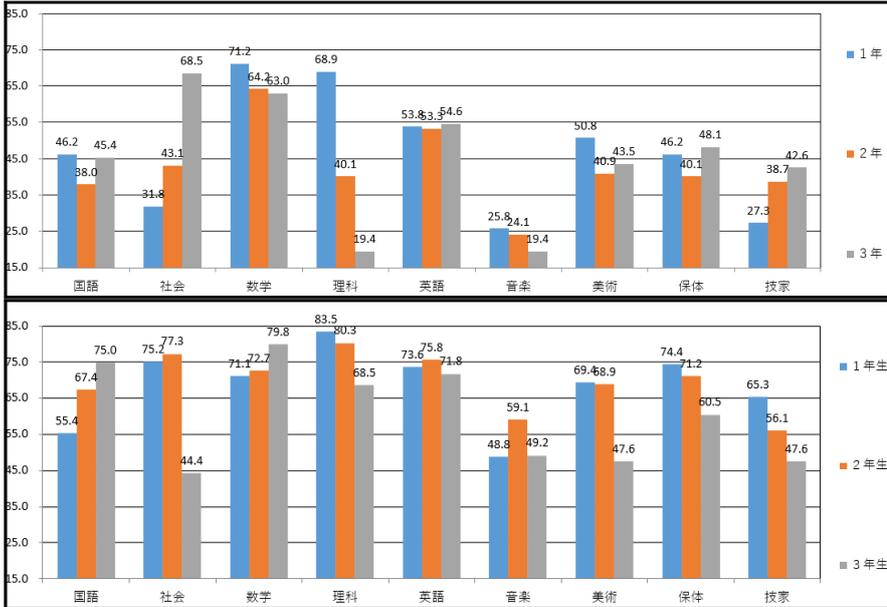
生徒も参加した授業研究会の様子

さらに、学期ごとに特別支援教育の視点、「SMARTな授業実践」の視点、生徒指導の視点で、相互の短時間の授業参観の期間（2～3週間）を設け、気づきを特別支援教育コーディネーター、研究主任、生徒指導主事が整理して全教員に配付・啓発している。

“CAP-Dシステム”のアンケート調査で、生徒が毎時間「わかった」「できた」「ためになった」と感じると回答する割合が高い教員の授業に、その指導のコツを学ぼうと授業を参観したり、職員室で尋ねたりする様子がある。

「1時間の授業で『できた』『わかった』と感ずることがいつもできている」と回答する生徒の割合も、令和2年6月に比べて令和4年11月は各教科平均して21.5ポ

イント向上している。



毎時間『わかった』『できた』と感じていると回答した生徒の割合(%)
(上：令和2年6月、下：令和4年11月)

令和4年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査項目「国語(数学、理科)の勉強は好きですか」「国語(数学、理科)の勉強は大切だと思いますか」「国語(数学、理科)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」「数学(理科)の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか」

若者コーナー

夢に向かって理科を頑張る

高橋絵美 中学2年 (御船町)

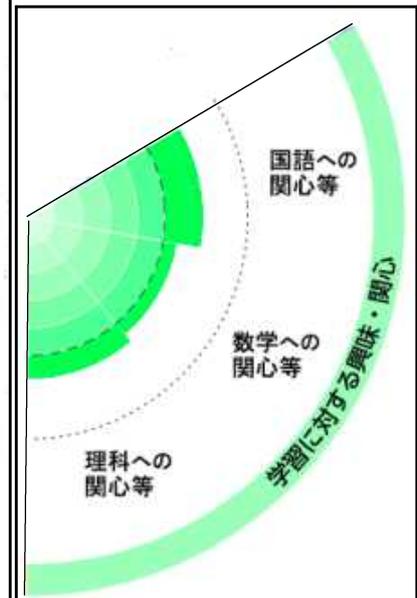
私が好きな教科は理科です。疑問に思ったことを班のみんなと協力し、実験して確かめたり、理由を考えたりするので面白いです。酸化銅をつくる実験では、加熱がうまくできずに重さがあまり変わらなかったこともありましたが、予想した通りの結果になった時に

は達成感を得ることができそうです。

先生は、血液の循環の仕組みや心臓の弁などを画用紙やペットボトルを使って分かりやすく教えてください。教科書や電子黒板を見るだけでは十分に理解できないことも、先生の手作りの模型などを実際に見ることで記憶に残りやすくなります。分からないことは時間をかけて「理解できた」と思うまで教えていただきます。周りの友だち

薬品を混ぜ合わせると塩素などの危険な気体が発生したり、場所によっては災害が起こる可能性が高かったりします。理科の学習をすることで、危険を予知したり避けたりすることができます。

これから授業もどんどん難しくなると思います。問題や実験に積極的に挑戦していこうと思います。私の夢である動物の看護をする職業を目指して、授業に集中して取り組み、受験に向けて復習をするなど、今できることを頑張ります。



令和4年度全国学力・学習状況調査 生徒質問紙調査の結果 (県基準のレーダーチャート)

「数学の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか」「将来、

地元紙に掲載された授業についての生徒の意見

理科や科学技術に関する職業に就きたいと思いますか」等の学習に対する興味・関心に関する肯定的な回答割合が全国や県の平均に比べて高いことも授業改善の成果と捉えることができる。

(2) 家庭学習の習慣化（基本的生活習慣推進）

① 生徒の主体的な活動

○ スマホ・メディア使用の新ルールの制定

CAP-Dシステムの調査結果から生徒会執行部の生徒たちは、スマートフォン等の使用状況に課題が大きいと考え、生徒集会や学級会をとおして「スマホ・メディア使用の新ルール」を制定した。数年前に生徒会で制定したルールを生徒が誰も知ら



なかった現状をふまえて、新ルールの横断幕やポスターを作成し、保護者を含めた町民にも中学生の取組を理解して応援いただけるよう掲示した。加えて、新ルールを掲載したクリアファイルを作成して全校生徒に配付した。

町民に生徒会新ルールを知らせる横断幕

町内小学6年生を対象に実施する新入生説明会では、中学生がクリアファイルを配

付して説明し、ルールの遵守を呼び掛けている。

○ 早寝・早起きの推進

生徒会保健委員は、毎学期に生活リズムチェック週間を設け、起床時刻、自立起床、メディア使用時間、就寝時刻、生活目標の5項目で自己評価を行い「生活リズムチェックシート」のレーダーチャートで生活を振り返り改善を図る取組を全校生徒で行った。

○ 生活ノートによる生活の計画と振り返り

見開きで1週間の記録を書き込む「生活ノート」に、帰りの会で家庭学習の開始時刻や計画を書き、家庭学習を推進している。家庭での自主学習の最後に実際の学習時間やテレビやスマートフォン等を使用した時間、日記を書き、朝登校したら学級担任へ提出している。担任は毎日学級の生徒の「生活ノート」と自学ノートを点検して、コメントを朱書きしたり、気になる様子があれば随時面談を行っている。

② 保護者と連携した啓発活動

○ 通知表を活用した長期休業期間の自己評価と保護者評価

休校期間や長期休業中に生活リズムの崩れがあるという課題をふまえ、その解決を図るために、通知表の様式を変更した。長期休業中の家庭でのスマートフォンやゲーム機等の使用ルールを長期休業に入る前に家庭で話し合わせ、終業式で通知表

を担当から受け取ったら約束を生徒自身が記入するようにした。

通知表を教師の評価を知らせるものだけでなく、生徒自身や保護者が生活を評価して学校に知らせるシステムは、生徒の長期休業中の様子を窺い知る資料になっており、新学期のスタートの教育相談や個別面談にも活用している。

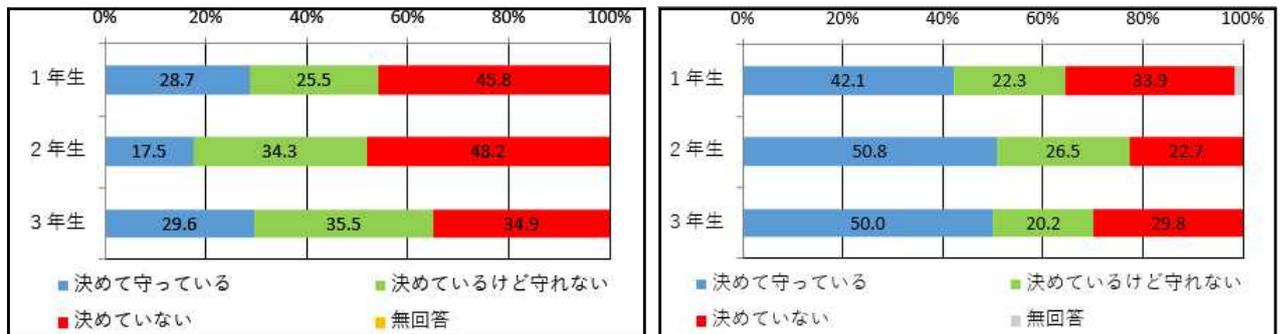
○ 「わくわく朝食コンテスト」の取組

P T A家庭部と生徒会保健委員会が連携して「わくわく朝食コンテスト」を行っている。これは、生徒自身が朝食を自分で調理し、食するスキルを育むための取組である。“CAP-Dシステム”で生徒の朝食摂取の状況を知ったP T A家庭部の保護者の提案で取組が始まった。

○ 標語コンクールの実施

P T A家庭部は、さらに、基本的な生活習慣標語コンクールを計画し、全校生徒に標語の募集を行った。表彰と優秀作品の掲示等を行っている。優秀作品を掲載した令和5年用カレンダーを作成し、小中学生や関係者へ配付し、啓発を行った。

これらの取組で、自分で決めた時刻に家庭学習を始める生徒や朝食摂取する生徒の割合が増えている。



「家庭学習を始める時刻を決めていますか」の質問への回答状況

(左：令和2年6月、右：令和4年11月)

(3) 学力向上タイム

家庭環境や低学力等が原因で、継続的な家庭学習の習慣が形成できない生徒が少なくないことに配慮して、定期的に学力向上タイムを設定して全校で取り組んだ。

テスト対策タイムは、定期テスト前の自主学習のしかたの指導や個別の質問への指導、補充学習指導を行っている。テスト教科担当の教師が巡回指導をし、それ以外の教師は分担して教室で個別指導や生徒同士の教え合いを推進している。

漢字・計算・英単語オリンピックは、教科部会が作成した級別問題にチャレンジし、どんどん進級を目指す学習で、全員に認定証を交付している。

学習につまづきのある生徒にとって、学び直しの機会や友だちと協力して学力の定着

を図る関係づくりの機会になっている。

(4) ゆうあいタイム

コロナ禍が長期間終息しない中、マスクを常時着用した生活が定着している。このことが、お互いの表情を読み取れず、6校以上の小学校から入学してくる本校の生徒たちの仲間づくりに大きな障害となっている。友人との関係がうまくいかずに、悩みを長時間のスマートフォン使用で紛らす実態もあった。休校措置による生活リズムの崩れと併せて不登校傾向の生徒増と大きく関係していると考える。

そこで、不登校の未然防止と安心して学習に取り組める仲間づくりを目指して、“ゆうあいタイム”を試みている。



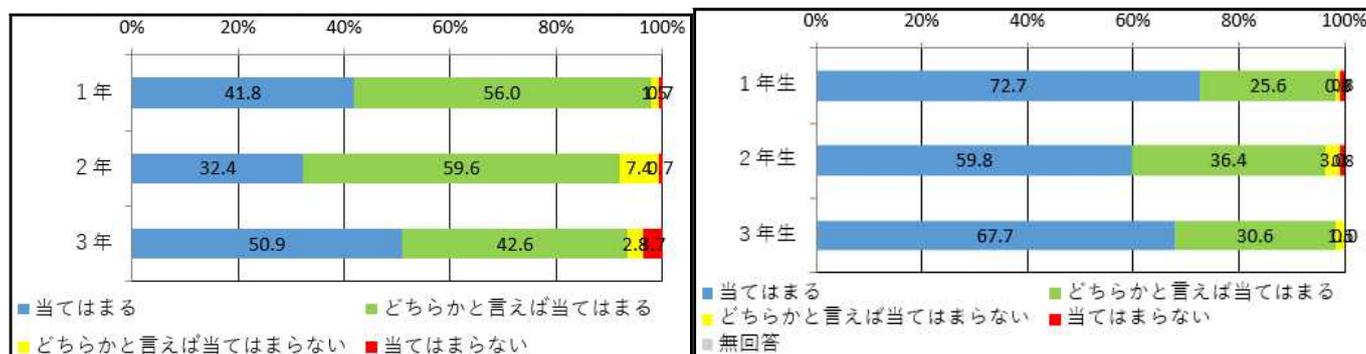
「ゆうあいタイム」の様子

金曜日の清掃時間15分間を“ゆうあいタイム”とし、代議員生徒がファシリテーター役をして学級毎にテーマを設定したグループエンカウンターを行っている。名称は、校訓の一つ「友愛」と「You & I」「言い合い」の意味を兼ねたものにした。

生徒からは「なるほど！という意見がたくさんあって、おもしろかった」などの感想が聞かれ、さらに工夫改善していくことで効果的であると考える。

また、入学直後の仲間づくりをねらいとして、以前は体育大会終了後の6月に実施していた宿泊教室を4月中旬に実施することにした。新型コロナウイルス感染症の新規感染者が依然として多い状況もあり、宿泊の形態は行わずに、校内や校区内で「町内ウォークラリー」等の集団行動訓練や仲間づくりの活動を行っている。このことで、小学校では不登校傾向にあった生徒が円滑に中学校生活をスタートできている。

このような取組が学校生活に温かい風土を生み、町外の学校生活に適応できかった生徒の転入が令和3年度末から増えている。それらの生徒も登校日数が増えている。



「御船中の生徒で良かったと思いますか」の質問への回答状況（左：令和2年6月、右：令和4年11月）

4 “CAP-Dシステム”の機能を生かした生徒活動・教育実践の創意工夫

本校教育目標の実現を目指して、年度の重点成果指標を前年度末もしくは年度当初に生徒会執行部生徒や各委員長が「自分たちが目指す生徒の姿」として考案するようにしている。生徒会役員は考えた素案をもとに校長と協議して案を策定している。この案が年度当初の職員会議とPTA総会を経て決定となる。

決定した重点成果指標は、学校だよりに掲載して町内全戸を回覧する外に、学校ホームページに掲載して地域に周知している。

重点成果指標の到達状況を年5回調査し、調査結果を教職員、生徒（生徒会役員等）、保護者（PTA役員等）、地域（学校運営協議会委員）に知らせて、成果や課題を共有し、課題の解決策をそれぞれが主体的に取り組むシステムを構築している。このPDCAサイクルを“CAP-Dシステム”と名付けている。PDCAサイクルのCheck「指標の到達状況点検」を起点に改善策に取り組むサイクルで、“CAP”は「つま先」、「D」は「課題・解決策の発見（Discovery）」も意味する。生徒、教職員、保護者、地域のつま先を課題解決に向かわせるという意味の造語である。

2～3か月の短いサイクルで取組の達成状況を明らかにして共有することで、生徒、教職員、保護者が成果や課題を共有でき、これまで述べたような主体的で創意工夫ある取組

が生まれているところである。

アンケート回答の個票は、管理職、養護教諭、学年部職員で回覧し、課題がみえる生徒の教育相談を行っている。その後、通知表のファイルに置いて保護者に渡し、我が子の自己評価として伝えている。

目標とその達成状況をこまめに共有することで、常

| 令和4年度 御船中学校 重点成果指標 | | |
|--|--|---|
| 自律「知識・技能」 | 創造「思考力・判断力・表現力」 | 友愛「学びに向かう力・人間性等」 |
| 落ち着いた生活する態度 健やかな体 | 進路を切り拓く学力 気づき、考え、行動する力 | 自分と同じように他の人を大切にできる心 |
| ◎私語をせず、先生の説明や放送を聞いて行動できる生徒の割合 90%以上（放） | ◎1時間の授業（教科）ごとに「良かった」「わかった」「興味が高まった」と、いつも（ほとんど）感じる生徒の割合 70%以上 | ◎学校や社会のために何をすべきか考え、行動している生徒の割合 80%以上（JRC） |
| ◎朝食を（毎日、ほとんど）食べている生徒の割合 95%以上（給） | ◎夢や目標の実現に向けて努力している生徒の割合 80%以上 | ◎毎日10回の「ありがとう」を実践している生徒の割合 90%以上（人） |
| ◎ハンカチ、ティッシュの持参、爪切りができている生徒の割合 90%以上、85%以上、90%以上（保） | ◎自分の考えや意見を発表して「良かった」と感じたことがある生徒の割合 70%以上 | ◎自分から、立ち止まって、笑顔で、大きな声（屋外では20m先まで聞える声）で、あいさつしている生徒の割合 85%・50%・60%・60%以上（生） |
| ◎昼休みや休日など、自分に合った運動をしている生徒の割合 80%以上（体） | ◎家庭学習をしている生徒の割合 各90%以上（文） ・家庭学習開始時刻を守る ・1時間以上の家庭学習をする | ◎無言清掃している生徒の割合 90%以上（環） |
| ◎安全に注意して登下校や学校生活をしている生徒の割合 100%（防） | ◎本（マンガ本や雑誌を除く）を1か月に1冊以上読む生徒の割合 100%（図） | ◎御船中「スマホ等の新ルール」を守っている（使用せざるを含む）生徒の割合 70%以上 |
| | | ◎御船中の生徒で良かったと思う生徒の割合 95%以上（軌） |

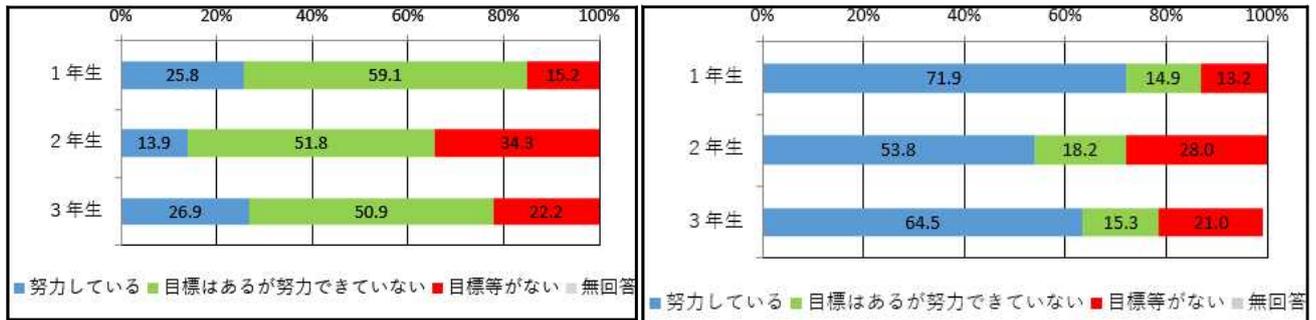
生徒会執行部・委員長の原案を元に作成したものです。（ ）は生徒会委員会名です。定期回りに達成状況をホームページに掲載します。

ホームページに掲載している重点成果指標

に目標を意識した活動や教育実践になり、同様の重点成果指標に関する経年推移は明らかに成果を見取ることができている。

IV 研究の成果と課題

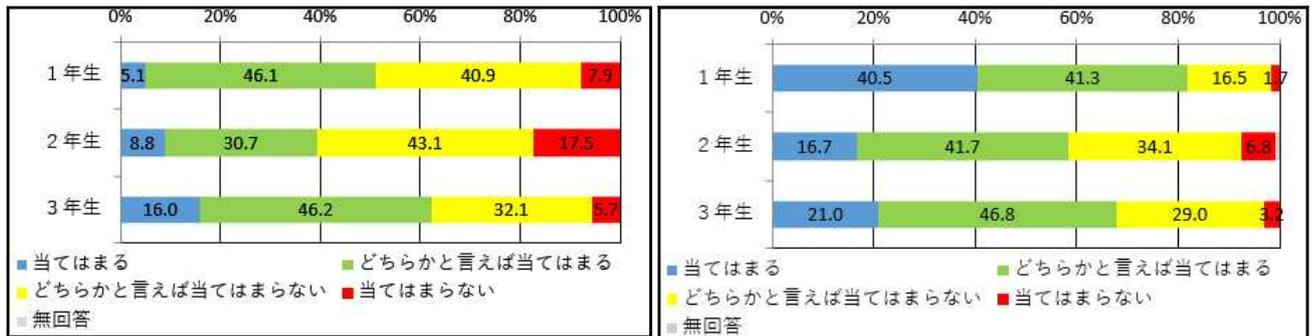
1 研究の成果



「夢や目標の実現に向けて努力していますか」の質問への回答状況

(左：令和2年6月、右：令和4年11月)

これまでに述べた取組によって、夢や目標をもって努力していると自己評価している生徒の割合は増えている。生徒との面談からは、「将来の夢がまだはっきりしない」と言う生徒もいるが、講演で生き方を聞く機会や聞き取りや体験活動で地域の方と触れ合って会話をする機会は、生徒にとって人生のモデルを学び、自己の生き方を考える絶好の機会と



「学校や地域のために何をすべきか考え、行動することはありますか」の質問への回答状況

(左：令和2年6月、右：令和4年11月)

若者コーナー

高齢者に寄り添う看護師に
原田莉風=中学2年 (御船町)

私の夢は看護師になることです。理由は二つあります。一つは、看護師をしている母から仕事の様子を聞いて、人の役に立っている仕事でかっこいいと思ったからです。母は、患者さんの容体が急変して帰りが遅くなることもあります。母も「莉風の良いところを生かせるよ」と勧めてくれます。二つめの理由は、高齢の方と交流

することが好きだからです。私の祖父母は一緒に住んでいませんが、とても優しくしてくれます。祖父は、よく「最近、学校はどうだね？」と話しかけてくれるし、祖母は、休日の部活動が終わって家に帰ると、昼食を準備してくれます。小学生の時は、一緒に童話を暗唱して発表会の練習を応援してくれました。そんな祖父母のおかげで高齢の方と話すのが好きになりました。病気になる高齢の方に寄り添う仕事がしたいです。夢が実現できるよう、人の気持ちをよく深く考えることを頑張っています。患者さんの気持ちがわかることで、看護師としてよい仕事ができると考えるからです。もちろん、勉強も部活動も頑張ります。

若者コーナー

やりがいある養豚継ぎたい
麻井基利=中学1年 (御船町)

僕の家は養豚の仕事をしていて、約1500頭の豚を飼っています。小学4年生のときに、自由研究で家の仕事について調べました。養豚は体力が必要な大変な仕事だと思いました。自分が育てた豚を多くの人に食べて喜んでもらえる、やりがいのある仕事だと知りました。先日、父の手伝いをしてみました。子豚80頭を小屋に入れる仕事で、とても疲れました。改めて、養豚は大変な仕事だとわかりました。父は、「今日は、豚のしっぽを切ったところか今日、豚を出荷したところか」と仕事の話をよく話してくれます。生き物の世話なので、父は小屋の温度調節など一日も休むことなく一生懸命に働いています。仕事をしているときの父は真面目です。そんな父を格好いいと思います。僕が「将来、養豚の仕事をした」と言ったら、父は「本当はできるかなあ」と笑って答えてくれました。自分の夢を実現するために、中学生になって勉強を小学校の時の何倍も頑張っています。勉強だけじゃなく、水泳も続けて体力づくりも努力していきたいと思っています。

地元紙に掲載された授業についての生徒の意見

なっている。感染症予防に配慮して実施した職場体験も生徒の職業観や勤労観を育む必要不可欠な体験学習であり、近い将来に社会を担う一員であることの自覚を高める意味でその効果は大きいと言える。

「将来の夢がまだはっきりしない」と語る生徒も、「人の役に立つ仕事をしたい」と話す生徒が多い。

また、総合的な学習の時間でふるさとで活躍する人の生き方に視点を当てた「御船輝き学習」を実施したことで、教職員が地域や人を知る機会となり、その他の教育活動でも協力を得るチーム学校の環境が醸成されてきている。

2 課題と今後の志向

課題の1つは、体験活動の確保である。コロナ禍が長期に渡るなか、体験活動が十分に実施できないことは否めない。体験不足が生徒の学びの不十分さや学びへの動機付けの弱さになっている面がある。地域社会と協力して、コロナ禍の体験活動のあり方をさらに模索していく必要がある。

課題の2つ目は学習意欲の高揚である。学習への関心は、全国学力・学習状況調査では全国や県の平均を大きく上回る結果ではあったものの、教科学習の「学び」と「将来の仕事」が結びつかずに「将来自分が望む仕事で活躍するためには学力の向上が重要」と考えない生徒が少なくないことも家庭学習時間の調査から明らかである。教科指導を生活や職業と関連付けた教材提示や問題解決型の授業で、学習の有用性や楽しさを味わわせる指導をさらに進めていく必要がある。

課題の3つ目は、キャリア教育（進路指導）に対する保護者・生徒と教師の意識が必ずしも一致しない点である。「生徒の個性や適性を考えること、理解すること」と「進学先の選択やその合格可能性の検討」に乖離があると思われるケースもあり、義務教育9年間をとおしたキャリア教育を進めるために小学校との連携をさらに進めていく必要がある。

「夢輝き！教育講演会」の保護者や小学校への配信の試みも検討していきたい。

また、熊本市教育委員会と連携した「“しごと学び”WEBライブ」を今年度3学期に試行し、次年度から本格実施する方向で準備を進めているところである。郡内中学校・小学校にも活用事例等の情報提供を積極的に行い、子どもたちの全人的な成長・発達を促す視点に立ったキャリア教育の取組を推進したいと考える。